

CLUB NEWS

WEEKLY
REPORT
YAMAGATA
CENTRAL



国際ロータリー第2800地区 第5ブロック

山形中央ロータリークラブ

30周年記念事業を終えて気持ちを新たに!

vol.
1332

2023・2024
MEETING

〒990-0039 山形市香澄町2-9-21 (株)メコム気付 事務所携帯TEL 090-1445-4120 FAX (023)642-1618

例会 毎週火曜日12:30~13:30(但し第5週は18:30~) 会場 ホテルメトロポリタン山形



- 会長 長玉ノ井憲史
- 会長エレクト 長谷川 淳
- 副会長 本間 雅之
- 直前会長 石山 徳昭
- クラブ管理運営 佐藤 太
- 職業奉仕 相川 博昭
- 社会奉仕 丹野 秀樹
- 青少年奉仕 伊藤 和子
- 国際奉仕 深瀬 隆志
- 幹事 高橋 恭治
- 副幹事 小林 敏郎
- 会計 神保 綾
- S A A 鈴木 陽子

国際ロータリー会長 コンドルマツカバ(スコットランド)
第2800地区ガバナー 伊藤 三之(山形北)
第5ブロックガバナー補佐 吉田 義尚(山形東)



世界に希望を生み出そう

◆日時/2023.9.5 12:30 ◆例会場/ホテルメトロポリタン山形 ◆ソング/国歌・奉仕の理想

会長挨拶



皆さん、こんにちは。まず最初に本日のゲストをご紹介します。株式会社フォーラムマルチプレックスシアターズ代表取締役の長澤純様です。同会社の代表取締役会長は今年度山形西ロータリークラブの会長をしておられる長澤裕二(ゆうじ)様です。外部からのゲストをお招きして卓話をしていただくのは今年度今回がはじめてで、後程卓話で山形の映画についてのお話をされるとのことですので楽しみにしております。

さて、先月のクラブフォーラムにおいて「会員増強に向けてみんなで考えましょう」というテーマでそれぞ

れ4つのテーブルに分けて皆さんでいろいろと熱くディスカッションとしていただき、大変盛り上がりいろいろな意見が出ました。その中でも特に多かったお話は、アットホームなクラブであるとか、例会場の利便性がよく食事がおいしい。とか女性会員が多いクラブなどというお話が多かったようでした。後日、高橋幹事が皆さんから出していただいたアンケートを集計し報告をしていただくとのことですので是非会員増強に向けての参考にさせていただきたいと思います。

今日は、月初めの例会でこの後いろいろな行事がありますので、挨拶は短かくとされていますこれで終わりたいと思います。本日も宜しくお願い致します。

ニコニコ情報

玉ノ井会長・高橋幹事/長澤さん本日の卓話ありがとうございました。今後ともよろしくお願いいたします。

青柳紀子/長澤さん、本日の卓話ありがとうございました。



9月 会員誕生・創立企業日

誕生日
金子昌弘 丹野秀樹 柴田修英 高橋恭治

企業創立記念日
高橋恭治 山形トヨベツ(株)
田中浩一 (株)セロン東北
伊藤和子 パンケットサービリアン

本日出席・修正出席

	会員総数	出席義務出席数	出席会員数	出席率
本日出席	37名	—	20名	—
修正出席				
他クラブでメイクアップされた会員				



ゲスト卓話

山形を映画の街に

(株)フォーラムマルチプレックスシアターズ

代表取締役 長澤 純氏

フォーラム立ち上げは、私の両親の話です。山形大学工学部の学生だった父と米沢女子短期大学の学生だった母は、父が主宰する映画サークルで知り合いました。大学卒業後の父には映画がやりたいという想いがありました。平日の夜にだけ映画好きな仲間と見る映画館、といったようなイメージだったようです。

大学進学率が高くはない時代に農家の次男が大学に通うことは非常に珍しいことで、工学部を出たら企業のエンジニアに当然なるものと周囲が思っていたところに父が「映画をやりたい」なんて言ったことで祖父に激怒され、二度と帰ってくるな、と勘当されます。

それで仙台にあった大きなチェーンの劇場に就職し、半年ほど働いた後、福島県にある原町文化劇場という赤字映画館への転勤を命じられます。客席にトイレの臭いが充満したり、椅子からバネが飛び出していたり、プログラムの大半がピンク映画だったり、いまも潰れそうなほど悲惨な状況だったその劇場で支配人をやり、映画館経営を実践的に学びながら3年かけて立て直します。収益が上がるようになると「このままだとウチが潰れる」と危機感を抱いたライバル館からの申し出により、その劇場は買い取られることになりました。それで支配人でなくなった父は山形に帰ることを決意し、当時まだ3歳だったかわいい孫…私ですね、の力を利用して、祖父に勘当を解いてもらいました。映画に対する情熱が並大抵のものではないことも理解してもらえたのでしょう。

地元に戻った父は、山形県映画センターという組織をつくります。あちこちの公民館や市民会館のような場所を借り、そこに映写機とスクリーンを持ち込んで上映するという移動上映を行う事業者です。

父はそれを仕事としながら、「山形えいあいれん」という自主上映サークルをつくります。みんなで会費を払って、みんなで集まって、みんなで運営を分担し、週に一度の上映会をやるようになります。旅籠町にあるビルの3階フロアの片側を映画センターの事務所



に、もう片側をえいあいれんの上映会に使いました。みんなが集うその場所は「フォーラム」と呼ばれました。いつも誰かが遊びに来ては用事もないのにおしゃべりしたり、次はなにやろう？これやろう！みたいなことを言ったり、チラシをつくったり、機関紙をつくったり、フィルムをカラカラ回して映画を見たり、終わったら感想を言いながらお茶会をやったり、という場所でした。

5年ほどすると、自分たちの劇場を持つ、という流れになるのです。当時35mmのフィルムはいわゆる興行つまり映画館の世界のモノだから一般の人には貸さないという商習慣がありました。映画館の収益を圧迫してしまうからという理由です。でもそこをなんとか貸し



てほしいと配給会社に相談したら「それならあそこの映画館を通してくれ」という話をされたのでそこへ行ってみると「うちの映画館を貸してあげるけど、その代わりチケットこれだけ売って来て」って凄いノルマを課されて、ヒィヒィ言いながら散々苦勞して売ってきたというのに、おいしいところは全部その映画館側に持っていかれた、みたいな事件が起きた。えいあいれんの仲間たちは憤慨して「こんなことなら自分たちの劇場をつくろう!」という機運が高まったのです。

「映画館経営に必要なのは仲間とお金とノウハウ」と考えていた父には、えいあいれんの仲間もいたし劇場経営のノウハウもありましたが、お金はありません。そこで苦肉の策として考えついたのが「市民株主」という方法です。「一口30万であなたも株主になりませんか?」と言って市民からお金を集めることにしたのです。実際、株主として出資してくれたのは20人ほど。やはり20代や30代くらいの若者には30万円というのはハードルが高いですからね。それでも「出資はできないけど会員にはなるよ」って言ってくれた人もたくさんいて、結局1,500万円を集めました。会員というのは10万円の会費を出すと10回分の映画チケットが10年間もらえます、というものです。えいあいれんの活動を一緒にやってきて支えとなってくれたコアなメンバーもいてくれたし、また、若者たちが自分たちの手で映画館をつくろうとしているなんて珍しいことだったから、新聞も面白がって好意的に取り上げて書いてくれたりもしたようです。

実際のところ、建設と設備にかかるお金は1億円近く

もかかるものだったので当然それだけでは足りず、父は現在の日本政策金融公庫から借入をしました。そのとき祖父は自分の田んぼを抵当に当ててくれました。祖父の応援があったから、父はこの事業をやることができたのです。ただ、実はこのときの抵当に、実家の田んぼだけではなく妻の、つまり私の母の実家の敷地も家屋も入っていました。父は次男で、実家には長男がいたので、もしこの事業が失敗したら、自分の家族だけでなく、実家も、田んぼも、実家にいる兄とその家族も、さらには妻の実家まで全員路頭に迷うことになる。ふつうならやめますよね、そんなこと。でも、それをやってしまうのが父の恐ろしいところです。失敗を考えない。絶対うまく行く、としか考えないのです。

大手町にできた初代フォーラムは97席と48席という2スクリーンの映画館で、上映作品は『未知との遭遇』と『ひまわり』でした。オープン日の1984年7月25日、お客さんが殺到しました。

この頃の映画館というと映画を見ながら食べるのも飲むのも常識で、空カンがカランコロンとコンクリートの床をどこまでも転げ落ちていくなんていうのがふつうでしたが、フォーラムは劇場内飲食禁止としました。さらに床はすべてカーペット敷きにして足音も響かないようにし、すべての椅子に傾斜をつけてスタジアム形式にするなど、現在のシネコンみたいなことを今から30年以上も前のこのときにすでに採用していました。すべて、映画に集中してほしいから、という理由によるものでした。この斬新さが非常にウケまして「映画好きならフォーラム」というブランドが確立

されていきました。「半年で潰れる」なんて言われながらも、お客さんは入ってくれました。



初期の「フォーラムだより」に掲載された懐かしい上映作品の数々。「南極物語」「天井桟敷の人々」「クレイマー・クレイマー」「イージーライダー」などが並んでいる

「すぐ潰れる」とか「絶対にうまくいきっこない」とか、周りからの声にはすごいものがありました。表向きには「市民出資による市民の映画館」の物語として非常に夢のあるいい話として語られることも多いですが、実際は綱渡りの連続で、本当に「運良く乗り切った」という感じでここまで来ているのです。

例えば、同業他社からの圧力で興行組合からフォーラムが突如除名されるという事件が起きたこともありました。配給会社に「フォーラムを除名したので今後一切フィルムを出さないように」という通達を出され潰されかけたり。幸いにもこのときは当時一番強い力を持っていたUIPという配給会社が味方について、フォーラムへの協力を表明してくれました。「インディ・ジョーンズ」や「バック・トゥ・ザ・フューチャー」といった人気作品を数多く持っていた会社だったので、私たちはなんとか生き残ることができた



のです。そもそもフォーラムをつくるときの最初の目的というのは、ふつうの映画館ではなくて「東京でしか見られないような作品を山形で見られるようにしよう」というものでした。

当時というのは本当に東京でしか見られない映画がたくさんあったのです。どうしても映画が見たいなら東京まで特急で…まだ新幹線がない時代ですからね、出かけて行って、一泊二日かけて見てくるというようなことをしなければいけなかった。だから例えば、東京で大学時代を過ごして山形に戻ってきた人のなかには、映画が全然見られなくて非常に困った想いをされていた方がいて、ものすごく映画に飢えているわけですね。そんな状況だったから、アート系作品を上映すると「山形でこれが見られるのか！」とすごく感動してくれるわけです。

とはいえ、父は映画館運営の経験から、アート系映画の上映だけでは十分な収益を上げることは厳しいだろうと考えました。商売としてちゃんと成立するような仕組みにする必要があると考えた結果、アート系とロードショー系の両方をやることにしたのです。それによって集客を確保し、経営を安定させようとした。アート系とロードショー系をごちゃ混ぜにしたプログラムにするというこのやり方は、現在のフォーラムにまで息づいています。この「ごちゃ混ぜ感」こそが私たちにとって非常に重要なファクターです。アートとエンターテインメントのどちらをも楽しめるようなトータルな空間づくりが大事なのです。

「バック・トゥ・ザ・フューチャー」が大ヒットし





た1985年、フォーラム山形は連日賑わいました。しかし福島のみちで公開されたのは、さらにそれから半年も後になってからのことでした。上映する劇場がなかったのです。それで福島にフォーラムをつくれれば映画ファンに喜ばれるだろうということで進出したのが1987年。状況は盛岡も似ていて、待っている人がいるのに面白い映画をやる劇場がないから、ということで盛岡にもつくりました。

こうして山形、福島、盛岡の3都市に劇場ができるとフォーラムの存在がチェーンとして認められ、配給会社からのフィルム提供の条件が良くなりました。さらには人口の多い大都市・仙台にも展開して4館体制になると、作品の上映をさらに早いタイミングでスムーズにリレーしていくことが可能になりました。劇場をつくる時に会員を募集する、というやり方ですね。福島と盛岡ではいずれも500~700人くらいの方が会員になってくださいました。

どのまちにも共通していたのは「話題の洋画作品を自分たちのまちで見られない」ということでした。「バック・トゥ・ザ・フューチャー、めちゃくちゃヒットしているらしいよ。なのに、なんでうちのまち

でやってないの？」という状況ですから、見たいのに見られない、けどどうしても見たいというシンプルな飢餓感がありました。

そこに「新しい映画館をつくります、建設資金をいま集めているのであなたも会員になりませんか、会員になるとお得に見られますよ」と募集をかけたら、結果として多くの皆さんが会員になってくださったのです。現在では、さらに八戸、那須塩原、東根を加えた7都市に全部で58のスクリーンを展開しています。

2000年には山形市内にソラリスをオープンさせていますが、これは1990年代にワーナーマイカルシネマズといったシネコンが進出し、まちの既存館が潰れていくという状況が各地で進行するなか、私たちが生き残りを賭けてシネコンに業態転換しなければならなかったからです。このときにも市民出資で資金を集めて新会社を設立し、6スクリーンのシネコン、ソラリスをつくりました。2003年の八戸フォーラムも、2006年に移転したフォーラム盛岡も、2009年の那須塩原もいずれもシネコンです。昔ながらのタイプの劇場は福島と仙台にあるのみですね。現在は香澄町にあるこのフォーラム山形も、大手町にあった初代の劇

場から移動してきたときに5スクリーンのシネコンに変えました。

昔の劇場のやり方というのは例えば、1本の映画をひとつのスクリーンで朝から晩までずっと回すのを1ヶ月間やるという非常にシンプルなもの。しかしこの方法はプログラムの柔軟性が乏しいだけでなく、わずしかかないスクリーンに対して受付や映写の人員を要するので経営効率が悪いのです。これに対してシネコンは、たくさんのスクリーンでも受付はひとつでいいので人件費の割合が相対的に下がります。また、朝から晩まで同じスクリーンで同じ映画をやるのではなく、当たってる映画は大きいスクリーンでたくさん回し、お客さんが少なくなってきた映画やコケ気味のものは小さいスクリーンで回数を減らして上映するということができるので全体としての収益を安定化できる。そういう理由で現在の香澄町に移ってきたのが2005年のことです。スクリーンの少ない映画館の経営効率が厳しいのは間違いありません。上映作品が少なければ大ヒットするか大コケするか博打に経営が左右されてしまうので、非常にリスクも高い。売上を安定させるためには、スクリーンの多い状態でいろんな映画を

細かく柔軟に編成するやり方が必要なのです。

また、私たちの場合はたまたま山形駅周辺にシネコンをつくったわけですが、市の郊外に別のシネコンができたときには、もうソラリスも終わりかなという気持ちになったものです。それでも、郊外の巨大なもの対まちなかのコンパクトなものという構図の厳しい争いのなか、幸いにもなんとかやってこれた理由を考えると、ソラリスとフォーラムを合わせた計11スクリーンを使っての上映プログラムの多様性ということがひとつにはあるかと思えます。また、配給会社からの信頼というのも大きいと思えます。経営のやり方がシネコンヘシフトしても、アート系もロードショー系もごちゃ混ぜにしてやるという創業の精神は変えずにやってきました。

ずっと父が判断してきました。でも、とにかく映画が好きなんですね。現在はほぼ東京にいて、試写室を回って映画を見るような生活をしています。経営的な仕事は最小限の時間で終わらせ、あとはとにかく東京行っては映画を見ている。天才肌の人で私には真似ができませんね。数字はすべて頭のなかにあって、プログラムもすべて頭のなかにあるから、紙に書くな



んで面倒だよってというタイプ。これまでも「教えてください、1ヶ月後のプログラムはどうなっているんですか?!」と必死にお願いしてようやく紙に書き出してもらえたりしました。経営することよりとにかくいい映画をどんどん発掘したい人なんです。このごろは私に対しても「経営的なことはお前に任せるから、俺は映画を見に行ってくるよ」という感じです。

日本のシネコンのクオリティは、設備的な豪華さもサービスの質もシステムの利便性もすでに相当に高く、世界有数のレベルに達しています。その反面、上映プログラム的にはまだまだというか…、客入りの良さそうな話題作だけをやるとか、どんなに質の高い作品であっても客が入らなそうなのはやらないという方針のところが多い。そんななかで私たちフォーラムは、一方ではシネコンとしての設備や利便性のレベルをしっかりと保つこと。もう一方では映画を愛してやまない映画ファンを大切にする姿勢を貫きながら「ごちゃ混ぜ」で多様性にあふれた上映プログラムを組むことという、このふたつのことをやっていきたいと思っています。フォーラムのスタッフは不思議と映画好きの人ばかりが集まってくるので、配給会社の方々から「フォーラムの人はみんな丁寧に愛情をもって作品に接してくれるから嬉しい」というお褒めの言葉をもらいます。配給会社の方たちも映画好きな人たちばかりなので、フォーラムの姿勢に強く共鳴してくれたり深い理解を示してくれたりします。「映画好きは商売できない、好きだと思いが邪魔するから好きじゃない方が商売はうまくいく」なんて時代もあったそうですが、それは過去の話です。

映画館業界の市場規模はだいたい2000億円前後で、それはここ15年ほぼ不変です。動画配信サービスが登場したり景気の浮き沈みがあるのというのに意外と左右されていないのは、どこかで時間を過ごしたい余暇のイベントとして根強い人気がある証拠です。だから、どんなに時代が変わり技術が変わろうとも、人が集まる映画館は廃れないだろうと思っています。劇場で働く私たちも、配給会社の方たちも、そして製作に関わる人たちも、みんな昔よりも今の方がずっとずっと映画好きな人ばかりになっていますから、未来を明るいものと感じています。

映画文化の創造都市としてユネスコに認定された山形市は、第一小学校旧校舎をその象徴的な場所として再整備化するためのQ1プロジェクトを進行中です。

例えば大学で映画の勉強をしてきた人で、社会人になってからも映画の勉強を続けたいという人や、地元で仲間と集まって映画作品をつくってみたいというような人のための場所というのはどうでしょう。経験ある指導者やコーディネーターがいて、作品づくりに必要な機材や道具もあって自由に使えたり、安価で借りることができる。世代を超えて交流しながら映画づくりにチャレンジできる。そんな場所になったらいいなあなんてことが、今おぼろげに思い浮かびました。

また、映画の世界では「こども映画大学」というのも流行っています。本物の映画監督が先生役で、子どもたちはシナリオと役者と撮影スタッフといったように役割分担して、ロケして編集して仕上げ、3日間で1本の映画をつくって発表会をやるという教育プログラムです。そういうのを山形で継続的にやるのも面白いかもしれません。

音楽も美術も、芸術の多くは表現と鑑賞がバランスよく両立できてるような気がしますが、映画だけはどうしても制作の敷居が高すぎるからか、鑑賞に偏りがちですよ。だからこそ、そういうことにチャレンジできる場になるといいですね。

